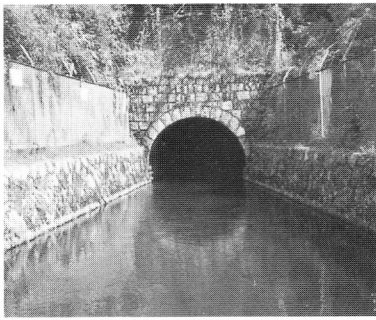


差しがなかったと言われ、隧道間には換気孔が三十個程が備えられ、この工事も隧道よりも長かったと言われている。

隧道は岩を掘り抜いたもので三四年間幾度かの大地震にも崩れず一部小さな落盤の他はその当時のツルハシ、タガネの跡をそのまま残して昔と変わらず今も立派に疏水の用を果たしている。壁に残ったツルハシの跡は「蜘蛛の巣間切り」といって代々友野家に伝わる甲州流土木法である。湖尻からしばらく掘り進んでいくとタガネの刃も立たない今までに堅い大岩盤に出合った。これは掘回す他に手が無いので直角に左に折れ又右に折れ丁度廻廊のようにコの字に掘り進んでいると与右衛門に最初の大難がふりかかって来た。

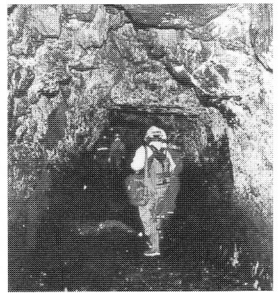
ある日多勢の役人が現場を見に来て工事の仕方に疑いを持ち関所破りの間道を掘っているのではないか、軍事上の陰謀を企んでいるのではないかと等就いて与右衛門を訊問し、果ては与右衛門を江戸に連行し牢に入れて取調べ



る事になった。箱根権現の別当はかわった。聖政僧正も江戸で宅預けとなり参考人として共々取調べ

べを受けた。詮議の筋は一、関所破りの間道に利用されないか二、陰謀のたぐらみはないか三、資金の出所四、武器類の物を持ちこんだ五、切支丹バテレンの法ではないか等について改めて与右衛門の身辺を仔細に調べることになった。その頃は天草の乱、由比正雪の乱のあと幾年も経っていず幕府は謀叛の疑いのあるものには特に神経を尖らせていたので与右衛門の吟味は厳重極まるものであった。陰謀の企みについては聖政僧正が決してその様な人物ではないと力を尽して弁護した。諸国の隧道工事の中には初めから軍事上の目的を兼ねて作ったものもあったので間道に利用しないかとの疑いは無理もないことであった。

会津藩では滝沢隧道を掘って用水を引いたが、事実白虎隊が会津城を抜けるときこの隧道を利用した。このように土木の法は兵法の一部として研究され発達した。この友野家は駿河に来て商人となって栄え分家は家伝の法をもって駿河や小田原で土木業をやり、又医者になった家もある。数ヶ月の厳しい取調べのち疑いが晴れ与右衛門は出牢してから工事に取回るかろうとしたが、この工事には箱根の関所に睨まれていたというので尻込みする百姓を源之丞と共に説き歩き、百姓を説得して工事の続行に取りかかった。再び数千人もの人々によって岩石との闘いが始まり峠を走り廻る人々の叫び声で沸きたった。これとは又別にこの疏水工事を敵視する者があり、新たに現れた敵は箱根権現に対する永年の怨みか



らどうにかして権現を陥れんものと「通り箱根」に住む者たちが疏水工事のアラを探しては一々関所に注進していた。千石原は何百年の昔から住んでいる住民たちも千石原に湖水を引き湖岸の景勝の地に住みたいとの念願から吾々を差置いて他国へ水を回そうとするのはとんでもないと住民の怒りは工事が進むにつれて激しくなったのはけだし当然のことである。こんどは軍事上の疑いだけで取調べは江戸に移され、組の掛りの者は代る代る奉行所に呼び出され、中にはそのまま入牢させられた者もあった。このたびの取調べは前よりも慎重で疑いが晴れたのは寛文八年三月から翌年の二月まで一年近くかかり、その間工事は中断したのであった。

与右衛門と源之丞らは又も人足のかかり集めにかかったが再度の入獄、工事中止では皆は恐れをなして応ずる者が少なく工事の再開の見通しがたたなくなった。工事中止で一番打撃を受けたのは出資者の友野と左衛門である。すでに産を傾けて投資をし隧道を掘り抜いて水を通さなければ一文も返ってこない。与左衛門は数千反の反物を駿府から取寄せて応募した人の家に配った。これが人を安心させるキッカケとなり、人数を集めることが出来た。こうして三たび数千人もの人達に

よる闘いが始まり、それから格別の故障もなく貫通したのは寛文十年二月十五日全長七百三十八間、下りの配水路も出来上がり初めて通水したのは四月二十五日であった。ホラ貝が鳴った。湖水の水は坑内の永い悪戦苦闘の仕事の跡を洗って真黒な濁流となって峠の沢を滝つ瀬と落ち、とうとうと深良村へ流れて来た。源之丞の発起に始まり与右衛門の正確な技術と友野家の大資本で引いた水が流れて来た否この水は延べ百万人も上る農民の汗と膏の滴りを集めたものである。「水が来た」最初の叫び声が深良村に起こった。村人は皆家から飛び出して「水が来た、水が来た」と口々に叫びながら走り回った。何かじつとして居られぬからである。その晩は名主源之丞方で盛大な祝宴が張られた。床の間を背に与右衛門が座り左に与左衛門元締たち工事関係者、右に源之丞、近村の名主達、今まで苦勞が大きかっただけに今夜はその埋合わせに底抜けに思い切り愉快に過ごそうという気持ちは誰の胸にもあった。源之丞が初めて与右衛門を訪ねた時からまだ十年もたないのに二人は何か遠い昔から始まったことのように思われた。その後与右衛門ら七人の元締は長泉村上土狩惣ヶ原に元締七屋敷をこしらえて住んで水路の補修と秋には上り米を受け取っていた。屋敷は街道を挟んで両側に並びそれぞれ表に米倉があった。与左衛門の住んだ屋敷は昔の交番のある一帯であると言われる。